様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5月　24日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520082
研究課題名（和文）対話的理性と構想力―ハーバーマスにおける批判理論の新たな展開のために
研究課題名（英文）Communicative Rationality and Imagination: Toward a new development of the Critical Theory in Habermas.
研究代表者
木前　利秋（KIMAE TOSHIAKI）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：40225016

研究成果の概要（和文）：ハーバーマスの批判理論におけるコミュニケーション的合理性の意義を明らかにするなかで、同時にそのより新たな展開のためには、構想力概念による補完が必要であることを説明することに努めた。とくにその言語理論において、言語の対話的次元以外に世界開示の次元が、構想力との関連で重要な意義を有すること、さらにまた「弱い自然主義」の概念において、理性と自然を結びつける要に、構想力が位置していることを強調した。

研究成果の概要（英文）：In exploring the significance of communicative rationality in Habermas' Critical Theory, I suggested that the concept of imagination is needed to develop his theory in the new direction. Above all I emphasized that besides one dimension of communication there is another dimension of world-disclosure in the language, which plays the important roll with relation to the imagination, and that in the conception of 'soft naturalism' imagination is a pivotal concept by which the Reason is connected with the nature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会思想史
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：批判理論、構想力、コミュニケーション的合理性、弱い自然主義

１．　研究開始当初の背景

ハーバーマスの批判理論については、彼のコミュニケーション的行為の理論から『事実性と妥当性』の法理論にいたる展開に注目する場合が多く、コミュニケーション的合理性や対話的理性の意義をめぐる議論がその大方を占めてきた。だが 1990 年代以降から最近にわたる新たな理論哲学的立場（たとえば「内的実在論」および「弱い自然主義」）には、理性の概念だけでは明らかにできないレベルが存在している。その点について、ハーバーマスも断片的に語ってはいるが、彼自身の手でより立ち入った考察がなされているわけではない。批判理論の新たな展開には、この点の欠を埋めていく理論的作業が必要とされていた。

２．　研究の目的

第一に、今日にまでいたるハーバーマスによる批判理論の展開を跡づけるなかで、対話的理性、コミュニケーション的合理性の概念の意義とその問題点を確認する。とりわけ 1990 年代以降の「内的実在論」と「弱い自然主義」という理論哲学的な立場が、これまでの理論的発展の結果として出てきたのはどのようにしてかを論じるかたちで、意義と問題点を考察する。また第二に、批判理論をあらたな方向に発展させるための手がかりとして構想力の新たなあり方について考察する。そのさい対話的理性と構想力の関係を社会理論の基盤におく理論的可能性を模索する。

３．　研究の方法

(1) これまでハーバーマス（広くはフランクフルト学派）の研究にたずさわってきた経緯もあるので、いくつかの具体的テーマにそくしてコミュニケーション的合理性の意義と問題点を考察する。

(2) ハーバーマスの言語論と自然概念について、とくに近年の新たな見解を中心に考察を進める。

(3) ハーバーマス研究については、すでに関連文献が多数出版されているので、言語論と実在論、自然概念にかんする研究論文を渉猟し、その解釈の動向を確認する。

４．　研究成果

(1)　コミュニケーション的合理性の意義と問題点を確認するために、市民的公共圏、自己反省の概念、行為とコミュニケーション、現代社会論といったテーマに即して各論考にまとめ上げ、理性概念との関連でも興味深い発見をすることができた。

①　ハーバーマスの反省概念には、合理的再構成と自己批判という二つの概念がある。ハーバーマスの理論的構築が進む中で、前者が前面に出て、後者は後景に退く傾向があった。しかし後者の自己批判という概念は、時代批判のコンテクストで依然として重要な意義を有し、むしろ両者の補完関係を明示した理論的再構成が求められる。

②　初期のハーバーマスには、技術的合理性を批判する立場として、コミュニケーション的合理性とは違った立場からの理論的模索があった。ハイデガーおよびマルクーゼに近い立場からの批判だがその後、この立場は捨てられている。

(2)　1990 年代以降の新たな理論的展開を追跡するなかで、とくに言語論と自然概念をめぐって、理性概念に収まらない次元が存在することを明らかにした。

①　言語といえば、ハーバーマスの場合、コミュニケーションの次元ばかりが眼につきやすい。しかし言語にはこれ以外に世界開示の次元がある。ハーバーマスは後者の次元を合理外的なもの a-rational と言っている。合理的とは言えないが、非合理的でも不合理的でもない次元である。

②　自然の問題については、ハーバーマスの場合、理性を人と人との対話的関係に位置づけて考える以上、理性と自然は分離し、両者には距離が存在していると解しやすい。しかし 1990 年代以降には「弱い自然主義」の立場が鮮明にされ、「自然との絡み合いのうちにある理性」がスローガンにされるようになった。

（３）　こうした言語論や自然概念を十分な広がりで分析していくには、もはや合理性という次元だけでアプローチするには限界がある。その補完項として重要な役割を担うのが構想力である。言語論をめぐるハーバーマス研究の論考で注目してよいのは、Cristina Lafont などによるハーバーマスの真理論批判である。真理合意説で知られる 1970 年代の真理論に対する批判を受けてハーバーマスは内的実在論の立場を取るようになるが、これが言語論の新たな展開に結びついていることが分かった。自然概念については、Steven Vogel、C.F.Alford など注目される論考から、マルクーゼとハーバーマスとの自然概念をめぐる相違について得るところがあった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 13 件）
① 木前利秋「時代診断としての批判理論―ハーバーマスと現代社会論 2」『未来』No.531、査読無、 (2010) 27-33
② 木前利秋「時代診断としての批判理論―ハーバーマスと現代社会論」『未来』No.530、査読無、 (2010) 27-33
③ 木前利秋「新たな自然の地平に寄せて―Ｈ・アーレントの「社会」概念・再考」『社会思想史研究』No.34、(2010) 23-36
④ 木前利秋「行為とコミュニケーション（5）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 13」『未来』No.520、査読無、(2010) 34-41
⑤ 木前利秋「行為とコミュニケーション（4）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 15」『未来』No.519、査読無、(2009) 30-37
⑥ 木前利秋「行為とコミュニケーション（3）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 14」『未来』No.518、査読無、(2009) 30-37
⑦ 木前利秋「行為とコミュニケーション（2）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 13」『未来』No.517、査読無、(2009) 30-37
⑧ 木前利秋「行為とコミュニケーション（1）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 12」『未来』No.516、査読無、(2009) 7-11
⑨ 木前利秋「方法としての自己反省（5）：理性の行方--ハーバーマスと批判理論 11」『未来』No.515、査読無、(2009) 32-37
⑩ 木前利秋「方法としての自己反省（4）：理性の行方--ハーバーマスと批判理論 10」『未来』No.514、査読無、(2009) 31-37
⑪ 木前利秋「方法としての自己反省（3）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 9」（『未来』No.513、査読無、(2009) 20-27
⑫ 木前利秋「方法としての自己反省（2）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 8」『未来』No.512、査読無、(2009) 31-37
⑬ 木前利秋「方法としての自己反省（1）：理性の行方―ハーバーマスと批判理論 7」『未来』No.511、査読無、(2009) 7-11

〔図書〕（計 3 件）
① 上村忠男、木前利秋他、未來社、『ある軌跡--未來社 60 年の記録』（2011）110-115
② 木前利秋・亀山俊朗・時安邦治編著、白澤社、『変容するシティズンシップ』（2011）145-187
③ 木前利秋・亀山俊朗・時安邦治編著、白澤社、『葛藤するシティズンシップ』（2012）83-124

６．研究組織
(1)研究代表者
木前　利秋（KIMAE TOSHIAKI）
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：40225016